1946年壺屋初等学校日誌にみる
那覇市の復興と学校教育

宮　城　能　彦

はじめに
1．那覇市の復興過程
　①　那覇区の開放過程と壺屋区
　②　那覇（市）の人口増加
　③　壺屋初等学校の設立
2．日誌にみる学校教育の復興
　①　児童数の増加と教育内容の工夫
　②　教育施設・環境の整備と高学年生の動員
　③　児童の生活上の問題点
　④　職員の給与と生活
おわりに－戦後資料としての壺屋初等学校日誌

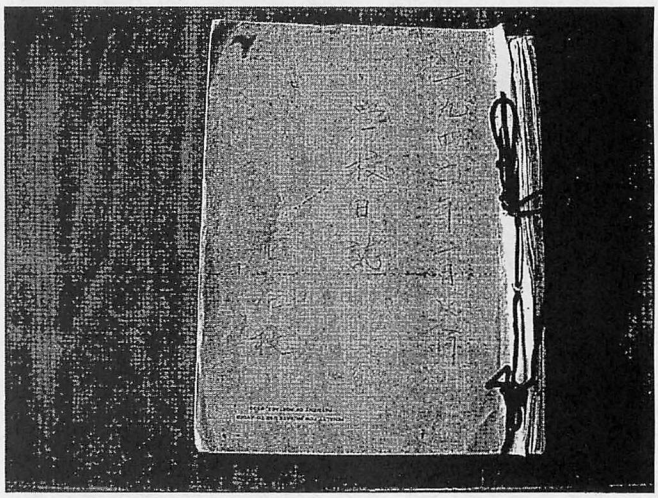
はじめに

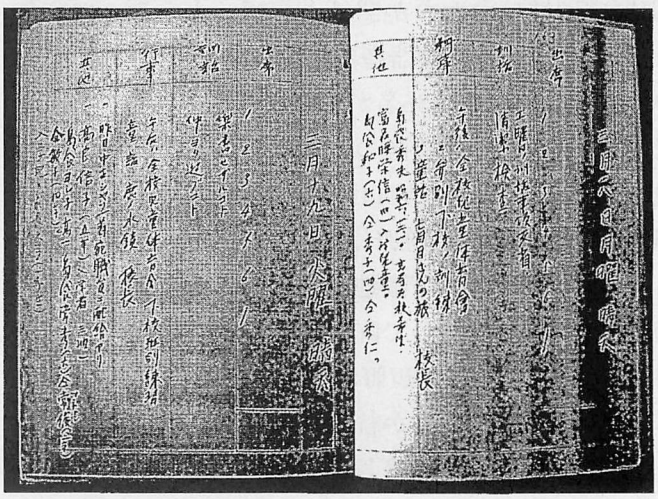
沖縄戦が終結した1945年から琉球政府が成立した1952年までの約7年間は、その史料の乏しさ故に最も研究が遅れている分野のひとつであろう。特に行政の末端や人々の生活の場、いわゆる「現場」の記録は、当時は食べるだけでも精一杯であったことや記録するための用紙等も入手しにくかったこともあって、後に語られた「回想」という形での資料以外には極めて乏しい。

本稿で紹介する『一九四六年一月以降　學校日誌　壺屋校』（1946年1月26日から4月15日までの記録）および『一九四六年四月　日誌　壺屋校』（1946年4月8日から翌年4月11日までの記録）は戦後那覇（市）において最初に設立された初等学校の設立当初からの記録である。

これらの史料によって当時の学校復興の様子を知ることができると同時にこれまで二次的史料で語られていた事柄の裏付け等ができると思われる。

『一九四六年一月以降日誌』および『一九四六年四月日誌』の二つの学校日誌は、壺屋小学校に保管されていたものである。いずれも、米軍払い下げのノートを綴り厚手の封筒を表紙にしたもので、『一九四六年一月以降日誌』のサイズはA6で、表紙は鉛筆書き、中はインクペンによって縦書きで記述されている。『一九四六年四月日誌』はA6サイズを横長に使用し、縦書きで記述。表紙は筆書き、中はインクペンを使用している。（写真参照）





1．那覇市の復興過程

①　那覇区の開放過程と壺屋区

終戦直後、沖縄本島の住民は収容所での生活を強いられていたが、1945年の10月ごろから、元の居住地に帰ることが許されるようになった。しかし、旧那覇市地域はなかなか開放されず、ようやく1945年11月10日になって陶器産業先遣隊103名が、続いて11月15日には設営隊136名が旧壺屋町への移動を許可された。その後、先遣隊の家族も翌1946年1月3日に移り住むようになり、同1月31日には982人（男478，女504）にまで人口が増加した。

1946年1月3日、糸満地区管轄の「壺屋区」が米占領軍の暫定措置として許可され、壺屋区役所がおかれた。初代区長には辺野喜潁英長氏が任命されたが、「壺屋区」は3ヶ月しか続かなかった。同年4月4日には「那覇市」へと昇格し當眞重剛氏が初代市長として軍政府総務部長から任命された。

那覇市の行政事務は、補助食料の確保、道路および家屋の修理、農耕地開拓、建設、保健衛生、治安維持等が主であった。解放されたわずかな地域を1班から4班まで分けて、それぞれに、班長、副班長、労務班長、総務班長（その下に庶務、産業、土木、衛生班）が設けられた。また、それとは別に自警団と医療機関を置いていた。

②　那覇（市）の人口増加

『那覇市概観』[①] によれば、壺屋初等学校が開校された1946年1月には人口は983人（1月31日現在）で、それからわずか一月半後の3月15日には1,279人までふくれあがる。その後特に1946年10月から11月にかけて、2,340人から4,065人と1,725人の増加（増加率73.7%）、さらに11月から12月の一月に4,100人の増加（増加率98.6%）である。（表1および図1参照）

人口増加が激しかった10月から12月にかけて、『壺屋校日誌』には毎日のように「入学児童数」（戦後初の学校なので2年生以上も「編入」「転入」ではなく「入学」と表現されている）が記録されている。それは少ない日で1～数名、多い日で20人以上である。11月27日などは「入學児二十余名」とあり、あまりの多さに学校が対応できていない様子がうかがえる。

ちなみに1946年3月15日現在の那覇（壺屋区）の年齢構成は図2に示した通りである。

③　壺屋初等学校の設立

壺屋初等学校の校長を引き受けた親泊政睦氏は、漢那から那覇に来たその日、1946年1月26日のうちに学校の敷地選定を依頼され、その日で場所を決定、早速翌日（1月27日）の午前9時に野原に子供達を集めて開校をした。校舎どころか何の施設もない、壺屋地区の高台の広場での「開校」である。

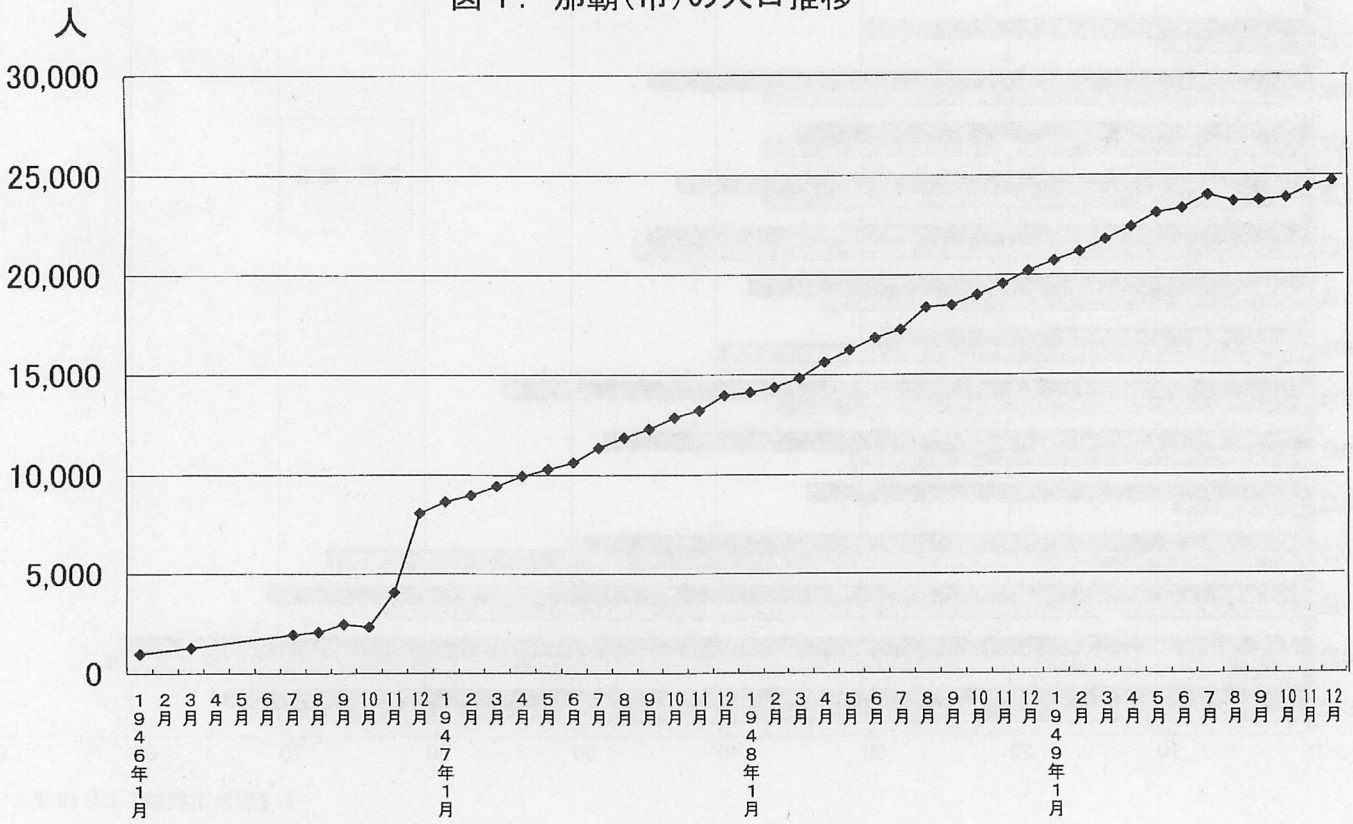
当時の那覇はそのほとんどが米軍の物資集積所となっており、その隙間のわずかな土地に千人足らずの人々の居住が許されただけの状態であった。そういった状況の中での急な開校の目的は、子供達に教育を施す以前の問題、すなわち、子供達の安全の確保と非行防止にあった。

表１．那覇(市)の人口推移

年付	総人口	内15歳以下 男	内15歳以下 女	内15歳以下 計	年月	総人口	内15歳以下 男	内15歳以下 女	内15歳以下 計
1946年1月	983				1948年3月	14,821	2,576	2,461	5,037
1946年3月	1,279	132	145	277	1948年4月	15,627	2,707	2,554	5,261
1946年7月	1,930	329	380	709	1948年5月	16,233	2,842	2,688	5,530
1946年8月	2,064	351	396	747	1948年6月	16,854	2,953	2,794	5,747
1946年9月	2,469	434	485	919	1948年7月	17,272	3,063	2,889	5,952
1946年10月	2,340	572	634	1,206	1948年8月	18,383	3,174	2,982	6,156
1946年11月	4,065	727	803	1,530	1948年9月	18,497	3,185	2,993	6,178
1946年12月	8,079	7,485	1,538	9,023	1948年10月	19,011	3,358	3,141	6,499
1947年1月	8,658	1,587	1,639	3,226	1948年11月	19,560	3,498	3,273	6,771
1947年2月	8,983	1,685	1,705	3,390	1948年12月	20,209	3,615	3,417	7,032
1947年3月	9,442	1,770	1,778	3,548	1949年1月	20,717	3,739	3,519	7,258
1947年4月	9,957	1,865	1,858	3,723	1949年2月	21,166	3,893	5,627	9,520
1947年5月	10,293	1,880	1,896	3,776	1949年3月	21,785	4,009	3,726	7,735
1947年6月	10,624	1,891	1,914	3,805	1949年4月	22,395	4,106	3,843	7,949
1947年7月	11,362	1,939	1,954	3,893	1949年5月	23,102	4,210	4,067	8,277
1947年8月	11,864	2,011	2,007	4,018	1949年6月	23,322	4,317	4,081	8,398
1947年9月	12,294	2,097	2,054	4,151	1949年7月	23,994	4,429	4,225	8,654
1947年10月	12,858	2,180	2,189	4,369	1949年8月	23,685	4,443	4,266	8,709
1947年11月	13,209	2,269	2,213	4,482	1949年9月	23,741	4,458	4,269	8,727
1947年12月	13,953	2,391	2,250	4,641	1949年10月	23,869	4,502	4,293	8,795
1948年1月	14,109	2,425	2,279	4,704	1949年11月	24,398	4,845	4,452	9,297
1948年2月	14,371	2,476	2,332	4,808	1949年12月	24,725	4,975	4,613	9,588

※『那覇市概観』59～60頁から作成

図１．那覇(市)の人口推移



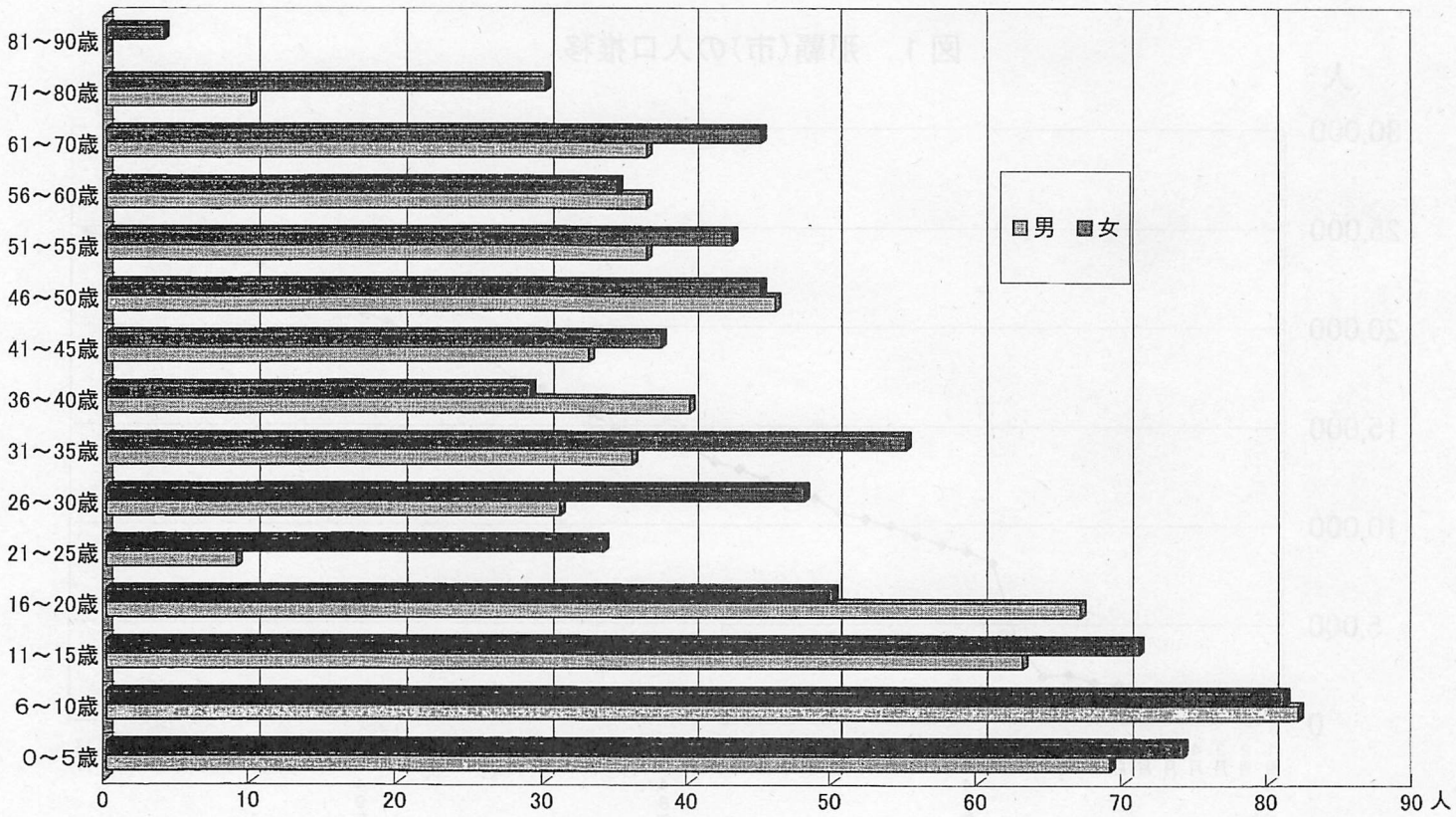
※『那覇市概観』59～60 頁から作成

表２．1946年３月現在那覇市の年齢構成

年齢歳	男	女	計
0～5歳	69	74	143
6～10歳	82	81	163
11～15歳	63	71	134
16～20歳	67	50	117
21～25歳	9	34	43
26～30歳	31	48	79
31～35歳	36	55	91
36～40歳	40	29	69
41～45歳	33	38	71
46～50歳	46	45	91
51～55歳	37	43	80
56～60歳	37	35	72
61～70歳	37	45	82
71～80歳	10	30	40
81～90歳	0	4	4
合計	597	682	1279

※『那覇市概観』より作成

図２．1946年３月現在那覇(市)の人口構成



※『那覇市概観』より作成

壺屋に移住してきた人々は陶器・瓦生産が目的であるため、子供にかまっている余裕がなく、さらに、米兵による犯罪も後を絶たなかったという。一日も早く学校をつくること、それは地域の人々の切実な現実から来ていたのである。その事情は、子供達を日曜日にも学校に来させ、教師も登校して子供達と一緒に遊んでいることからもうかがえる。

児童は1年生から8年生まで152人。それに対してようやく来てくれた先生は、校長を含めて男性3人、女性6人のわずか9人であった。しかも、そのうち3人は旧制中学の上級生（沖縄戦で学校が中断）である。当時は、「資格のあるものは男も女も壺屋に来るのは控えて」[②] いたということである。

有志の方々の援助で職員室としてのテント小屋はできたものの、教室はない。いわゆる青空教室であったため、雨の日は休校になってしまう。教科書・教材もないため、小石を使って数の勉強をしたり、歌ったりかけっこをする日々が続いた。当時の学校日誌からも、体育会や運動会といった行事が毎日のように行われていることがわかる。

暫くすると、幼稚園設置の声が強くなってきた。これも、就学前の子供達の安全確保が主な理由だったと思われる。幼稚園は初等学校開校から3ヶ月後、4月に開園した。

2. 日誌にみる学校教育の復興

① 児童数の増加と教育内容の工夫

1946年1月26日に学校敷地が決定、翌27日は開校式を行っている。そこはただの空き地であり、校舎はひとつもなく、いわゆる「青空教室」からの出発である。翌1月29日には生徒が集められ、校長1人、教頭1人、教員7人（内「代用教員」5人）、生徒数140人から那覇における戦後の学校教育が始まる。生徒の内訳は1年生35人、2年生16人、3年生32人、4年生14人、5年生16人、6年生12人、7年生（高等科1年）15人、8年生（高等科2年）0人であった。1年生が多いのは、当時就学年齢に達していない子ども達も集まって来たからだという[③]。

その後、那覇への移住者が増えるとともに生徒数も増加していく。特に9月以降は九州へ疎開していた生徒達が帰還してきたために[④] ほとんど毎日のように児童が「入学」（転入）して来ている。（表3，表4）

校舎も教材もない壺屋初等学校では、当然のことながらとにかく子ども達を集め集団で行動する所から始まる。日誌からは、教科書やノート、筆記用具がない状況から、ほんのわずかな支給によって学用品がそろってくること、ところが、その数は学校教育が普通に行われるために必要なレベルにはほど遠いことが理解できるであろう。

生徒がはじめて学校に登校した日、早速「高等科男、六年男生ニ対シ帳面一冊宛支給ス」とある。しかし、要するに、1年生から5年生の男女と6年、高等科1年、2年の女子にはノートは支給されなかったと

表３．壺屋初等学校出席数１～３月（『1946年１月以降 學校日誌 壺屋校』より）

日付	出席者数	日付	出席者数	日付	出席者数	日付	出席者数
1月29日	140	2月6日	153	2月13日	154	2月24日	171
1月30日	148	2月7日	160	2月14日	163	2月26日	193
1月31日	152	2月8日	133	2月15日	163	2月27日	188
2月2日	120	2月9日	133	2月16日	160	2月28日	187
2月4日	155	2月11日	147	2月17日	160	3月2日	214
2月5日	147	2月12日	147	2月18日	160	3月18日	163

表４．壺屋初等学校入学（転入学）者数

日付	初等学校	幼稚園	日付	初等学校	幼稚園	日付	初等学校	幼稚園	日付	初等学校	幼稚園	日付	初等学校	幼稚園	日付	初等学校	幼稚園
4月1日～15日	19		6月12日	−3		9月13日	1		10月11日	4		11月20日	7		1月25日	2	
4月17日	2		6月14日	1		9月14日	3		10月12日	2		11月27日	20余名		1月28日	3	
4月18日	1		6月15日	−2		9月16日	2		10月14日	2		12月3日	5		1月29日	3	
4月23日	3	1	6月17日	2		9月17日	8		10月15日	5		12月4日	6		2月3日	4	
4月24日	2		6月19日	1	1	9月18日	7	2	10月16日	2		12月10日	10		2月10日	3	
4月30日	1		6月20日	1		9月19日	1		10月17日	1		12月11日	13		2月11日	3	
5月6日	2		6月24日	5		9月20日	2		10月18日	4		12月13日	20		2月12日	3	
5月8日	2		6月29日	1		9月23日	7	1	10月19日	1		12月14日	1		2月13日	6	
5月9日	1		7月2日	2		9月25日	7		10月21日	1		12月16日	6		2月15日	3	
5月11日	2		7月9日	1		9月26日	2		10月30日	18		12月17日	10		2月17日	2	
5月13日	4		7月10日	1		9月27日	2		11月4日	4		12月18日	10		2月18日	3	
5月14日	3		7月22日	14		9月28日	2		11月7日	5		12月20日	5		2月22日	3	
5月16日	5		7月23日	2		9月30日	4		11月8日	4		12月21日	3		2月24日	5	
5月17日	3		8月2日	4		10月1日	4		11月9日	3		12月23日	20		3月3日	4	
5月21日	1		8月24日	3		10月2日	3		11月11日	3		12月24日	3		3月4日	2	
5月24日	6	1	9月3日	2		10月3日	1	3	11月12日	4		1月10日	8		3月7日	3	
6月3日	4		9月4日	3	1	10月4日	0	1	11月13日	5		1月11日	2		3月13日	4	
6月4日	2		9月5日	1	1	10月7日	32	1	11月14日	5		1月13日	5				
6月6日	−2		9月9日	1		10月8日	2		11月15日	1		1月14日	5				
6月8日	−1		9月10日	1		10月9日	6		11月16日	5		1月15日	3				
6月10日	2		9月11日	1		10月10日	2		11月18日	7		1月20日	4				

※「退学者」（転校）がいる場合はマイナス（−）で表示。「入学者」と「退学者」が両方いる場合は差し引きして示した。
※『一九四六年四月日誌』より作成

いうことである。同じ日、いくらかの物品と教科書が届くが、それは、用紙3束、鉛筆3箱、教科書は、5年生の算数30人分、2年生の算数20人分、3年生の算数30人分、4年生の算数20人分にすぎない。1月30日には「全児童ニ鉛筆一本、四、五年生ニノート一冊宛支給ス」とある。

教材が極端に乏しい中、教師達が考えたのは体育会（運動会）であった。体育会（運動会）が行われた月ごとの回数は以下の通りである。

・2月6回（実施されたのは、4日午後3･4年生、5日午後1･2年生、7日午後4･5･6･高等科1年生、19日午後全校児童、21日午後全児童、24日・日曜日午後2時から4時半まで全児童）
・3月8回（6日午後全児童、7日午後1･2年生、8日午後3年生以上の女児、11日午後3年生以上の男児、18日午後全校児童、19日午後全児童、21日午後全校児童、28日終了式後全校児童）
・4月7回（16日全校児童、17日全校児童、25日午後より区民体育大会に全校児童参加、29日糸満市における体育会に職員児童35人参加、午前8時出発午後3時帰校）
・7月1回（5日午後全校児童体育会）
・11月3回（20日午後全児童運動会予行練習、21日午後全児童運動会予行練習、24日・日曜日全校児童体育会9時から4時まで）
・1月1回（1月27日全校児童、創立1周年記念行事として）

娯楽のない時代、生徒達の体育会（運動会）は、集団生活のための訓練であると同時に、生徒達自身のレクレーションでもあり、また地域・父母の楽しみでもあったと思われる。

親泊政睦初代校長は『壺屋小学校創立二十周年記念誌』の座談会において、当時のことを「高学年は授業後野球、排球の練習で競技方面に趣味を持たせ、野外に出かけるくせを強制しました。おかげで糸満や石川市の競技会に出場して好成績をあげました。」[5]「体育会を開催したのは、開校して間もない四月中旬頃だと思います。児童も訓練づけられ、それに服装も揃い始めたので、区役所は父兄有志の方に感謝と喜びの意を表したい心から催した次第でした。プログラムも十五回位、最も喝采を博したのは綱引きで、ロープの寄贈があったので、来賓の綱引きには東方

父兄有志、西方アメリカ白黒の兵隊さんで、戦後初めて見る国際綱引き、一回では勝負がつかず西方の申し出で、二回でやっと勝負がつきましたが、当日大城組からは商品の寄贈があり、盛況裡に閉会しました」[6] と語っている。

体育会と同様に、学芸会も多く行われている。実施されたのは、5月26日（日曜日）「児童ノ小學藝會」、6月15日（土曜日）区域班長会開催後児童小学芸会（當間市長来校）、9月10日（火曜日）「今夜第五班（牧志）ニ於テ本校児童・高等學校女生徒合同ノ學藝会開催ス」、2月25日（火曜日）午後父母会において児童学芸発表、の4回である。

② 教育施設・環境の整備と高学年生の動員

開校して1週間後には「雨天ノタメ一時限終帰宅セシム」とある。要するに校舎がないからである。いわゆる「青空教室」から出発した壺屋初等学校において、学校における活動の中心は(特に高学年）校地の清掃、整備、校舎建築などの作業にならざるを得ない。

学校が設立されて4日目の1月29日の行事は、高等科（初等学校は8年制）と6年生男子は校内清掃作業とある。その後、

・「本日上級児童校内整理ヲナサシム」（1月30日）
・「上級男生校地整理作業ヲナス」（1月30日）
・「午後上級男生校地内作業（2月13日）
・「六年男子生校内作業ヲナス」（2月15日）
・「午後ハ職員児童ニテ黒板塗り、並ニ　菜園ノ準備作業ヘ六年男女」（3月13日）

等の記録が多くみられ、それは牧志（壺屋小学校現在地）に移転してからも続く。

・「午後六年以上校内作業ヲナス」（12月7日土曜）
・「午後ハ五年以上校庭、校舎ノ整理作業ヲナス」（12月11日水曜）
・「午後昨日仝様校庭作業ヲナス」（12月12日木　曜）
・「六年以上校内作業」（12月14日土曜）

当時は授業時間を学校建設に充てるばかりでなく、食料事情から学校内においても食料を生産しなければならなかったことが、例えば次の記録などからわかる。

・「午後ハ職員児童ニテ黒板塗リ並ニ菜園ノ準備作業ヘ六年男女」3月13日
・「ウンチャイ菜園ニ植付ヲナス」（5月16日）
・「農園ヲ六組ニ分ケ　六年以上男女別　各組ノ作業ヲナスカヅラ植付ヲ主ニス」（5月28日）

③ 児童の生活上の問題点

1月29日、開校初日、最初に校長が話したことが「校地内ニ於テ遊ブコト」である。その後も同じような注意が繰り返される。当時は不発弾その他で学校周辺は危険だからである。学校の周りはほとんどが未開放地であった。しかし、学校敷地には塀などなく、境界にドラム缶や薬莢を並べていただけである[7]。2月3日には「今後日曜日ニハ未就学児童（五、六、七才）モ同伴シテ登校シ運動場ニ於テ先生ノ命ニ従ヒ遊ブ事」との校長訓話がある。また、「校地内デ遊ブコト　厳達ス」（2月19日）等の記録が多くみられる。

それだけではない、日曜日にも教職員は出校し子どもたちと遊んでいる（2月17日、日曜日「本日未就学児モ登校シ学童ト共ニ校庭ニ於テ遊バシム」）。学校設立の目的のひとつが子どもの安全確保にあったことがこれらの記述からわかるであろう。

しかし、問題は子どもの安全ばかりではない、貧困と周囲の環境（当時壺屋の周辺は米軍の物資集積所）から、児童による米軍物資の窃盗（いわゆる「戦果」）が相次ぐ。2月2日には「児童ノ窃盗取締ノ件、欠席児童ノ取締」とある。同4日には警察署より公文書「児童窃盗ニツキ」。さらに、「左記児童警察筋ヨリ注意ヲ受ク」（5月25日・土曜）、「左ノ児童警察当局ヨリ注意ヲ受リ」（7月2日・火曜）、等の記述がみられる。

学校においては校舎・教材の絶対的な不足という問題をかかえながら、混沌とした時代の教育環境としては「最悪」な状況のなかで、とにかく子ども達を「学校」に集め、何らかの「教育」あるいは集団生活を営ませることの意義は非常に大きかったといえるであろう。

④職員の給与と生活

『一九四六年一月以降日誌』には給与・俸給の記述はない。『一九四六年四月日誌』において給与の支払いが最初に記されているのは、6月16日「本日五月分俸給職員へ渡ル」である。日誌には6月7日「職員俸給辞令到來ス（四月三〇日付任命）」とあり、その内容が『一九四六年四月　任免簿　壺屋校』に記録されている。それによると、校長500円、教頭400円、本科正教員[8] A氏および本科正教員B女教員C女教員250円、本科正教員D氏およびE女教員220円、代用教員F，G，H，I，J女教員180円であった。

当時の180～500円[9] というのはどれくらいの価値を持つものであろうか。

1946年12月20日沖縄県知事志喜屋孝信は軍政府副長官宛に、「御同情ある措置あらむことを請願いたします」と文教部長からの請願書（文教一九三号、一九四六年十二月十九日、「教員待遇に関する請願の件」）を転送している。

現在の配給食料だけでは十分生活はできない。その不足分は自ら生産するか、他から買って補わねばならない。然るに教職員は教育に全力を尽くして居るため自ら生産する暇がない、これが現在の教職員の最もおおきな悩である。配給品以外の島内の生産物資はものすごく高く到底公定価格では買えない。物資は戦前の五倍乃至、十倍に高騰しているのに対し軍政府の提示せる俸給は校長に例をとれば戦前俸給の一倍半乃至二倍にしかならない。斬くては教職員の生活はおびやかされ家族の多い者に至っては最低生活さへ支えることができない[10]。

給与だけでは到底生活ができない教員に対し、わずかながらの生活物資の配給があったことが日誌に記されている。

・「職員全部ニ下駄一個宛ノ配給アリ」（2月22日）
・「紅茶二個　学校へ配給　職員全部へ靴スミ一個配給」（2月26日）
・「田芋一斤半　職員全部ニ配給アリ」（3月2日）
・「昨日中古シャツ一着宛職員ニ配給アリ」（3月19日）
・「職員　眼鏡　一個宛配給アリ」（3月22日）
・「黒糖職員一同へ配給アリ」（4月18日）
・「職員一同へ夏シャツ一枚宛配給アリ」（4月22日）
・「職員ノフトンカバー（白）一枚宛配給アリ」（5月9日）
・「職員五名ニ呉座一枚宛配給アリ」（5月16日）
・「職員全部ニ冬ズボン下一枚宛配給アリ」（5月20日）
・「職員一同白布ノ配給ヲ受ク」（5月25日）
・「職員二対シ左ノ配給アリ御菓子　コーヒー」（5月28日）
・「職員ニ左ノ物品配給ヲ受ク、カッパ一着宛　鍋一個宛」（5月30日）
・「文教部ヨリ教職員用服地一人分着、中村教官へ配給」（1947年1月18日）

当時は給与だけで生活することは不可能であり、仕事の合間に自ら畑を耕してというのが一般的な教員の生活であった。1950年代に入ってもなお「独身者ならともかく家族・子どもをもつものにとって教員を続けていくことは非常に困難であった。家族を養うことはできなかった。」

おわりに－戦後資料としての壺屋初等学校日誌

1945年6月に沖縄戦の本格的戦闘は終結し、いわゆる「戦後」の時代を迎える。しかし、1952年4月1日の琉球政府設立までは政治的・制度的に紆余曲折があり不安定な時期であった。

・1945年8月20日沖縄諮詢委員会設置（志喜屋孝信委員長）
・1945年9月20日、6つの地区で市会議員選挙及び市長選挙（9月25日）
・1945年9月21日陸軍から海軍へ軍政が移行
・1946年4月22日　沖縄民政府（沖縄中央政府）発足（志喜屋孝信知事）
・1946年4月26日沖縄議会（知事の諮問機関）発足
・1946年7月1日　軍政、海軍より陸軍へ
・1946年10月21日　沖縄民政府、東恩納より知念へ移転
・1946年12月11日　沖縄中央政府沖縄民政府と改称
・1947年2月1日　布告に基づき沖縄群島市町村長（2月

1日)及び、市町村議会議員選挙(2月8日)
・1947年7月21日　市町村制公布
・1950年11月4日　沖縄群島政府発足、平良辰雄知事
・1950年12月15日　軍政府廃止し琉球列島米国民政府（ＵＳＣＡＲ）設立
・1951年4月1日琉球臨時中央政府発足
・1952年4月1日　琉球政府発足（初代行政知事に比嘉秀平）

那覇市の場合、1946年1月3日に糸満地区管内壺屋区役所設、同年4月4日に那覇市へと昇格した（戦後初代・通算10代目那覇市長に當間重剛)。

教育制度も、初等学校令および同施行規則（初等学校8年・高等学校4年制）が交付されるのが、ようやく1946年の4月になってからである。

壺屋初等学校が設立された1946年の1月は、那覇の壺屋区の一部が「陶器製造産業先遣隊」に開放されてから2ヶ月後、そして「壺屋区役所」設置後一月もたたない時期である。そういった状況のなか、まさに手探り状態で学校を運営していくことになる。

さて、壺屋初等学校の日誌を読み進めていくと、ほんのわずかながらも教育環境が整えつつある中、行われているのは戦後の「新しい」教育ではなく、戦前の学校教育の「復興」である。

例えば、学校開校初日、校長訓話の2番目は「方言ヲ使用セザルコト」である。それは、その後も「方言使用ヲツツシムコト」(9月13日）等のように折に触れて注意される。その事から、沖縄が日本の一部であり、日本の地方であるという意識、そして（近い）将来はまた日本の一地方としてやっていくのだという暗黙の前提、そういった雰囲気が社会、少なくとも学校関係者にはあったととらえるのは考えすぎだろうか。

いずれにせよ、沖縄戦終了と共に新しい社会、新しい学校教育が始まったわけではない。いわば当然のことではあるが、新しい「戦後」が始まるのは、戦前の制度や組織がある程度復興して後のことである。単純に沖縄戦の「戦前」と「戦後」を分けて考えるということは、この日誌に記された1946年前後が忘れられてしまう、ということにはならないだろうか。

沖縄の戦後復興のことを「ゼロからの出発」と表現することが多い。確かに物質的にはゼロからの出発であった。しかし、何もない中で懸命に行われていた学校における教育は、「戦前」の教育を受け、その教育を行ってきた人達による「復興」である。

たとえ戦争が終わり全てが焼かれ米軍による直接の支配を受けるようになったからとはいえ、意識が急に変わったとは思えない。「さあ戦争は終わった。今日から自由だ」というのはごく一部のインテリ層の「回想」であり、「自由」とか「民主主義教育」等というはそれよりもずっと後のことであったのではないか。

とにかく、一日も早く、雨が降っても風が吹いても壊れない教室を建て、いす、机、黒板、ノート、鉛筆、そして児童全員分の教科書を手に入れ、または造り、子ども達に必要な教育を与えることを目標に、日々淡々と仕事をしていく。『日誌』はそれを伝えている。

付記：『一九四六年一月以降　學校日誌　壺屋校』(1946年1月26日から4月15日までの記録）および『一九四六年四月　日誌　壺屋校』(1946年4月8日から翌年4月11日までの記録）は、那覇教育史研究会による注釈・解説・参考資料等を付して、沖縄大学地域研究所より『地域資料叢書第2巻』として刊行予定である。

註

① 那覇市役所発行『那覇市概観』1951年（1951年9月4日琉球民政本部許可)
② 親泊政睦校長談（『那覇市概観』1952年、那覇市役所、159頁』)
③ 当時の職員（ただし赴任は1月31日）であった本村ツル氏（旧姓佐久川）へのインタビュー（2002年5月20日）より。
④ 例えば、「うるま新報」1946年8月23日。
⑤ 『壺屋小学校創立二十周年記念誌』1966年、24頁
⑥ 『壺屋小学校創立二十周年記念誌』1966年、24～25頁

⑦　『壺屋小学校創立二十周年記念誌』1966年、23頁および当時の職員であった本村ツル氏（旧姓佐久川）へのインタビュー（2002年5月20日）より。

⑧　小学校（国民学校）の教員免許状で、主に師範学校卒業者がもっていた資格。大学卒業者でも基本的に検定試験に合格しなければ代用教員であった。

⑨　この年（1946年）4月15日に第一次通貨交換が行われ、日本新円とB円軍票が沖縄の指定通貨になっている。

⑩　琉球政府文教局『琉球史料第三集』1958年、391～392頁